事　業　報　告　書

事　　業　　名	介護の日にちなんだ、国民に向けた介護の魅力発信プロジェクト企画の実施事業
事業の実施状況	『介護の日（11 月 11 日)』にちなみ、多くの国民の皆さまに『介護』について理解を深めていただくこと、『介護』について考える機会を提供することを目的として企画した。 具体的には、介護にまつわる映画として、今年度は「明日の記憶」を取り上げ、その際、「介護の日」を紹介する動画①と、認知症専門医である松本一生先生（松本診療所（ものわすれクリニック）院長）と当会会長の及川による対談の動画②を、映画本編の前後に置き、国民の皆さまに１週間視聴いただける環境を提供した。 本企画については、当会ホームページにバナーを配置するとともに、当会の note 上で詳細のご案内等をさせていただいた。 https://note.jaccw.or.jp/n/n59ee96c67035 １　日　時：令和７年 11 月 10 日（月）から 16 日（日）まで ２　視聴方法：オンライン ３　視聴対象：上限を設けず募集 ３　周知広報の方法 ホームページ及びＳＮＳを活用するなどした
事 業 の 成 果	1000 名を超える方からお申込みいただき、約 80 名の方から感想が寄せられた。 フリーアンサーでは、 ・　以前はこの映画を、認知症と診断された方の視点でみていましたが、今回は、介護をする側、特にご家族の視点にたち、視聴させていただきました。認知症介護に関わる社会的課題について知るよい機会となりました。 ・　当事者の葛藤、支える家族の葛藤、周りの理解などを広く表現してあり、普段接している方々のことをイメージしやすかったです。 ・　症状の進行とそれを受けとめて生きる姿に共感した。 ・　普段、高齢者、身体障がい者のケアに携わっているので、若年性アルツハイマー型認知症の当事者の心の変化を知ることができ良かったです。辛いのはご本人だけれど、支える側の家族の辛さや難しさを感じました。最後の医師と及川会長対談の中で寄り添いつつ、過剰な関わりが

	負担にならないよう自然体に…の言葉が印象的でした。 ・　病気を受け入れることで、残された能力を発揮したり趣味を持ったり、若年性の場合はまだまだ明日積み重ねる出来事があると思うと、地域と関わりながら在宅で自分らしく生きることができたらいいなと思いました。また家族も輝けるようなサポート体制も必要だと感じました。 ・　認知症と告知された本人が恐怖と不安に苛まれる様子が痛いほど伝わりました。家族が一緒に寄り添っていたいと思う気持ちと、限界を感じる気持ちに苦しむ姿も痛いほど理解できます ・　認知症になっても住み慣れた環境で生活が続けられるように、認知症の理解は必要だと思います。 ・　学校で習ったアルツハイマー型認知症の症状がたくさん出てきて、胸が締め付けられる思いだった。1 番辛いのは認知症になったご本人だということがよく分かった。 ・　映画上映後の対談が、より理解を深める助けとなっており、とても良かった。 ・　認知症になった義母と付き合って 20 年になります(介護をして、ではなく付き合って、が当てはまると思います)。5 年前から自身の職場(老健)で看ています。そろそろ看取りの時期になりました。なんだか反省の毎日です…。ごめんね、お義母さん。 ・　介護、受ける。支える。一生関わっていくことと思います。 ・　認知症と戦っている方の気持ちを理解した上で、関わりを持ってもらいたい。 ・　世間の人たちの認知症理解が足りないと感じます。 ・　認知症になっても社会の一員として生き生きと生活して行けたら良いですね。 などのご意見をいただいた。 　この映画が、多くの国民の皆様の認知症の理解を促すとともに、介護を考えるきっかけとなり、介護の価値を伝えてくださったと考えている。